The Japan Society of Educational Sociology

旧制神戸一中卒業生の進路選択に関する一考察

——上級学校進学者の進路規定要因について——

○橘　佳江（神戸女子大学大学院）

はじめに

本研究の目的は、兵庫県立第一神戸中学校（以下神戸一中）の上級学校進学者が、どのような社会階層なのか、どの程度の成績でどこに進学したのかを個表データを使用して検証していくことである。

神戸一中の卒業生の進学先の集団傾向から、なんらかの進路規定要因があったと考える。その集団傾向とは以下の表からわかる。

（人）		Ⅰ期(1910-1917)	Ⅱ期 (1918-1932)	計
1	神戸高等商業学校	77	303	380
2	第三高等学校	81	124	205
3	関西学院	34	76	110
4	慶応義塾大学	17	91	108
5	第六高等学校	21	85	106
6	第一高等学校	33	47	80
7	神戸高等工業学校	-	77	77
8	大阪高等商業学校	14	41	55
9	早稲田大学	15	36	51
10	第七高等学校	27	21	48
11	第八高等学校	16	24	40
12	大阪高等工業学校	24	12	36
13	同志社大学	16	20	36
14	第五高等学校	7	27	34
15	大阪高校	-	26	26

１９１０－１９３２年卒業生進学校上位１５校

1910—1932 年に、本校を 2456 名が卒業した中で、進学者は 1970 名であった。この表は 1970 名が進学したうちの上位１５校である。ごらんの通り、進学先の第１位は、神戸高等商業学校（以下神戸高商）で、続いて第三高等学校（以下三高）、関西学院と続く。このように、神戸一中において各進学先の学校が一つの集団として形成されている。特に、1 期と 2 期ともに、上位で神戸高商と三高に集中していることや、私学の関西学院と慶応大（私大は T7 までは専門学校、T8 から高等学校程度の予科を置く）が三高に続いていることが興味深い。これらの各進学先は、どのような集団で形成されていたのであろうか。

１データと分析方法

分析対象は 1910—1932 年に神戸一中を卒業し、上級学校に進学した 1970 名である。（四修者を除く）時期区分は出自が判明する 1910 年卒業から、新「高等学校令」が公布される前年の 1917 年までを 1 期とし、公布された 1918 年から 1932 年までを２期とした。1・2 期を通して、明治後半から昭和初期の卒業生の進学傾向が把握できる。次にデータベースは、『参考簿』と、『交友会誌』から作成した。『参考簿』から出自の変数「保証人の職業」を、到達の変数として『交友会誌』から「進学先」を利用した。進学先は、卒業直後の進学先を使用する。これらの進学者には浪人も含まれる。成績は、卒業直後の５年級を使用する。成績は、『各学年試験成績表』を参照した。成績の指標は席次を学年全体人数で割って 100 掛けたものを【席順スコア】とした。この【席順スコア】の値が低いと上位成績で、100 に近いほど下位成績ということになる。

次に席順スコアを５等分して、ランク１（上位）からランク５（下位）までの５段階にカテゴリ化したものを【席順ランク】とする。（河野 1999）さらに、各学校進学者の席順スコアを平均したものを【席順スコア平均】とした。この【席順スコア平均】から当時の上級学校の難関度が明らかになる。出身階層（親職）の分類は井上【2005】にならい、商業層を近代商／在来商というように分けて分類することにした。

２　各上級進学校の難易度

まず、各進学校の難易度を、進学者の【席順スコア平均】を使い検証する。検証する進学校は、進学者が多い順上位１３校を対象とした。次のような難易度となった。

Ⅰ期(1910-1917)			Ⅱ期 (1918-1932)			
順位	進学先	席順スコア平均	順位	進学先	席順スコア平均	
1	第一高等学校	13.5	1	第一高等学校	20.1	↓
2	第三高等学校	26.9	2	第三高等学校	23.7	↑
3	東京高等商業学校	35.2	3	大阪高校	25.5	−
4	神戸高等商業学校	35.5	4	第八高等学校	33.6	↑
5	第六高等学校	43.8	5	神戸高等商業学校	34.9	↑
6	大阪高等工業学校	44.2	6	神戸高等工業学校	36.9	↑
7	第七高等学校	45.6	7	第六高等学校	38.3	↑
8	第八高等学校	50.9	8	第五高等学校	47.8	−
9	大阪高等商業学校	59.2	9	大阪高等商業学校	57.9	↑
10	関西学院	62.5	10	第七高等学校	58.6	↓
11	慶応大学	62.9	11	関西学院	67.4	↓
12	同志社大学	76.0	12	早稲田大学	69.2	↑
13	早稲田大学	72.9	13	慶応大学	70.3	↓

1・2 期ともに、最難関は第一高等学校（以下一高）で、次に三高であった。進学者が一番集中していた神戸高商は１期で４位、２期で５位となっている。神戸高商を【席順ランク】で考えると 1・2 期ともに「２ランク」となる。次に進学先の上位であった、関西学院と慶応大を見てみる。関西学院は 1・2 期を通して、「席順スコアの平均」の値は高く下位となっている。同じく慶応大も下位の成績であったことがわかる。つまり、成績上位の多数が神戸高商、三高に集中し、成績下位の進学者は関西学院や慶応大に集中したことになる。この結果は、次の結果から顕著となる。以下の

NII-Electronic Library Service

表は各席次ランクにおいての輩出率（各ランク別進学先人数／各ランク人数）である。つまり、各ランク内において進学者がどこの学校に集中したかがわかるのである。これらは、先ほどと同様に上位１３校をピックアップした。

１期において、席次ランク１の者が多数進学したのは、三高であった、その次に一高となり、神戸高商と続いた。２期になると、ランク１の者は神戸高商へ１番多く進学しており、次に三高、一高と続いている。次に１期において、ランク４と５の者は一高に全く進学しておらず、逆にランク１と２の者は同志社、早稲田大に進学しなかった。この傾向は２期においても同様であった。（２期においてランク４と５者は一高、ランク１と２者で早稲田大に若干名在籍するが少数である。同志社は１３位以下）このように、１・２期を通して【席順ランク】の上位の卒業者は、官立の学校へ進学し、【席順ランク】下位の卒業者は私立の学校へと進学したのであった。

I 期（1910-1917）

各ランク内輩出率		席次ランク				
順位	進学先	1	2	3	4	5
1	三高	26.6%	16.4%	10.8%	3.7%	0.7%
2	神戸高商	17.3%	18.6%	10.8%	6.7%	2.9%
3	関西学院	1.4%	3.6%	5.8%	6.0%	8.0%
4	一高	18.0%	3.6%	2.9%	-	-
5	七高	3.6%	6.4%	5.8%	1.5%	2.9%
6	大阪高工	5.0%	2.9%	5.8%	2.2%	2.2%
7	六高	4.3%	4.3%	2.9%	3.0%	0.7%
8	慶応大	0.7%	2.1%	2.9%	4.5%	2.9%
9	東京高商	5.0%	3.6%	1.4%	2.2%	0.7%
10	八高	0.7%	4.3%	3.6%	1.5%	2.2%
11	同志社大	-	-	1.4%	6.7%	3.6%
12	早稲田大	-	-	3.6%	3.0%	4.3%
13	大阪高商	0.7%	2.1%	2.9%	1.5%	2.9%
	非進学者及不明	5.8%	11.4%	13.7%	29.1%	41.3%
	N	139	140	139	134	138

II 期(1918-1932)

各ランク内輩出率		席次ランク				
順位	進学先	1	2	3	4	5
1	神戸高商	28.6%	27.0%	14.3%	10.6%	5.1%
2	三高	19.7%	9.6%	3.4%	2.0%	0.6%
3	慶応大	1.1%	1.4%	5.2%	8.4%	10.1%
4	六高	5.9%	8.7%	4.6%	2.8%	1.8%
5	関西学院	0.5%	2.5%	4.3%	8.7%	6.8%
6	神高工	7.0%	5.4%	5.2%	2.5%	1.8%
7	一高	8.4%	2.0%	2.3%	0.3%	0.3%
8	大阪高商	1.1%	2.3%	3.2%	2.0%	3.6%
9	早稲田大	0.5%	1.1%	1.4%	2.2%	5.1%
10	大阪高校	2.7%	3.9%	1.1%	0.3%	-
11	五高	0.5%	2.5%	2.9%	1.1%	0.6%
12	八高	1.9%	2.8%	1.4%	0.6%	-
13	七高	0.5%	0.8%	1.1%	2.5%	0.9%
	非進学者及不明	5.7%	12.1%	22.9%	29.1%	42.0%
	N	370	355	349	358	336

３進学先×親職

次に、進学先の関連パターンが出自によって異なるか否かを検証してみる。分析方法は各社会階層（親職）ごとに、どの学校へ輩出したかを算出する。例えば、出自が「会社員」で、神戸高商へ行くとする。そのパターンが出自「会社員」１００人中、２０人神戸高商に進学したとしよう。その輩出率は、２０÷１００×１００＝２０％となる。つまり、会社員全体で２０％が神戸高商に進学したことになるのである。これにより、各出身階層がどこへ積極的に子弟を輩出したしたのかが分かる。詳しい分析結果はここでは割愛するが、親職別(その他／軍人警官／神官僧侶はここでは除外した)に、進学率の高い順に１～４とランク付けし、以下のような表にした。

I 期

親職	N	進学輩出率ランク 1		2		3		4	
官公吏	56	三高・神戸高商	16.1%			七高	7.1%	関西学院	1.8%
教員	39	神戸高商	20.5%	一高	5.1%	七高	7.7%	早大・大阪高工・六高	5.1%
農業	31	三高	16.1%	八高・同志社・早大	6.5%				
会社員	135	三高	17.8%	神戸高商	8.9%	関西学院・一高	6.7%		
近代商	73	神戸高商	20.5%	三高	19.2%	関西学院	8.2%	七高	5.5%
在来商	78	神戸高商	14.1%	三高	10.3%	関西学院	7.7%	七高・六高	6.4%
鉱工業	36	大阪高工	16.7%	三高	13.9%	一高	8.3%	神戸高商	5.6%
専門	40	神戸高商	12.5%	一高・三高	7.5%			七高	5.0%
無業	54	三高・神戸高商	20.4%			関西学院	13.0%	一高	5.6%

II 期

親職	N	進学輩出率ランク 1		2		3		4	
官公吏	85	神戸高商	23.5%	一高・慶応・六高・早大	4.7%				
教員	82	神戸高商	17.1%	神戸高工	8.5%	六高	7.3%	三高	6.1%
農業	33	神戸高商	18.2%	早大	9.1%	大阪高商	6.1%		
会社員	507	神戸高商	19.1%	三高	8.1%	慶応大	7.5%	六高	5.3%
近代商	234	神戸高商	27.8%	三高	8.1%	六高	5.3%	慶応・神戸高工	7.5%
在来商	160	神戸高商	25.6%	三高	8.1%	慶応大	6.3%	神戸高工	5.6%
鉱工業	92	神戸高商	19.6%	神戸高工	10.9%	関西学院	9.8%	八高	5.4%
専門	80	三高	22.5%	六高	11.3%	神戸高工	5.0%	大阪高校	5.0%
無業	33	神戸高商	20.4%	慶応大	12.0%	六高	9.9%	三高	6.3%

１期において神戸高商へ積極的に輩出したのは、教員と近代商であった。次に三高へ輩出する率が高かったのは無業、近代商である。また、一高への進学輩出は鉱工業と専門が高い値を示していた。

次に２期になると１期で高い値で神戸高商へ子弟を輩出していた教員だが、その値は低下する。それは、神戸高等工業学校へと子弟を輩出するようになったとからだと考える。その代り、在来商が神戸高商へ積極的に進学するようになる。官公吏は１期に比べて、２期になると神戸高商への輩出率が高くなり、同時に一高への輩出率がどの階層よりも高くなっていた。三高への進学者は専門の輩出率が高くなり、同時に六高への輩出率も高めていた。会社員は１期で高かった三高の輩出率を 2 期で低下させている。このような変化の背景には、出身階層ごとに進学者の成績が影響していたのではないだろうか。もしくは、ある社会階層には、成績よって進学先が左右され、ある社会階層は成績によって左右されないという可能性もある。さらに検証するべく、進学先×親職に成績という変数を掛け分析を進めたい。

【参考文献】

河野誠哉，1999，「旧制中学校の内部過程における学業成績の実態に関する研究―山形県鶴岡中学校を事例として―」『東京大学大学院教育学研究科紀要』39 巻（広田編第 4 章に収録）

井上義和，2005，「近代実業層は進学名門校をどのように利用したか―旧制神戸一中卒業生の個票データの分析から―」科研費補助金研究成果報告書『近代化過程における教育政策と産業・労働政策の整合・葛藤』（研究代表者：広田照幸），第 10 章。

NII-Electronic Library Service